

# 恩師カザルスの

## さまざまに思い出が蘇った

### バルセロナ ヨーロッパ音楽祭2009より カザルス埋葬30周年記念追善公演を中心に

文＝平井丈一郎  
Text＝Takeichiro Hirai

長年にわたり亡命生活を余儀なくされ、望郷の念に駆られながら世を去ったパブロ・カザルス。彼の遺骨が故国に帰還埋葬されて30周年を記念し、6月にスペインのバルセロナで記念イベントが開かれた。ここでは、カザルスの後継者として招かれたチェリストの平井丈一郎氏に、現地での模様を恩師の思い出とともにご寄稿いただく。なお、このバルセロナ公演は、ヨーロッパ5カ国を巡る氏の楽旅の一環として行われた。

#### 伝説の音楽家として招かれた ロンドン公演

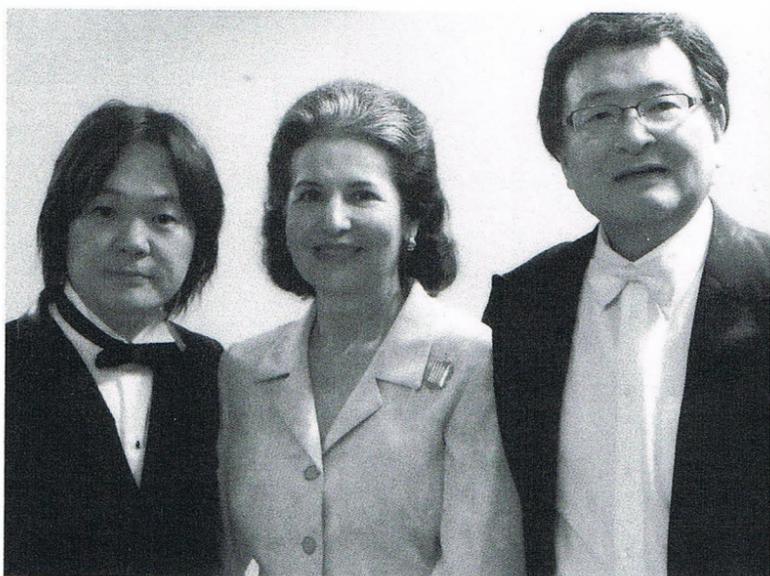
このほど私はピアニストの次男・平井元喜を伴って、6月8日のロンドン公演を皮切りに約3週間にわたるヨーロッパ5カ国（イギリス、デンマーク、スペイン、ルーマニア、フランス）への楽旅を行った。過去半世紀以上にわたり世界40



平井丈一郎と平井元喜～ロンドンのウイグモア・ホール前にて



カザルスと平井丈一郎(1960年プエルトリコ)



カザルス未亡人・マルティータさんと

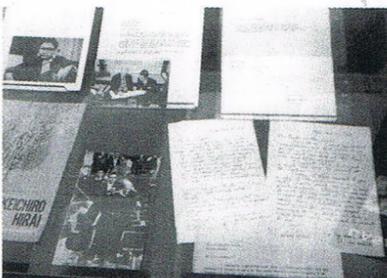


カザルス音楽堂で演奏する平井丈一郎・元喜父子

数カ国に及ぶコンサート・ツアーを行った私にとって、欧州ツアー自体は決して珍しいものではない。しかし、今回の楽旅は今まではかなり趣を異にしていた。それはまず第一に、今年が時あたかもフランコ独裁政権下で行き場のなかった恩師カザルスの遺骨がスペイン（カタロニア）に帰還埋葬されて30周年の年に当



「カザルスと平井丈一郎写真展」より



終生熱烈に祖国を愛したカザルス先生が、長年にわたり亡命を余儀なくされ、生前「望郷の念断ち難し」という中、決して帰国することができなかった師の無念を思い、喜びとともに胸痛む心境でステージに立つ私だったが、演奏中、期せずしてさまざまな思い出が脳裏をよぎるのであった。先生の指揮で四大チェロ協奏曲を演奏した時のこと、先生ご夫妻と私の3人で世界各地を旅した時のこと、そしてもう一つは、今から51年前、弱冠20歳の私が先生に代わって単身スペインに赴き、美しいサン・サルヴァドールの海岸に面したカザルス邸の保存状況を視察し、先生に報告申し上げた時のこと等々だ。その同じ場所でも演奏している現実を思うにつけ、私は唯々感無量であった。

写真展では、先生と私の往復書簡やプログラム等も展示されていたが、先生が私の古い手紙の1つ1つに至るまですべて大切に保存して下さっていたことを初めて知り（現在はバルセロナ市所蔵）、驚きと感謝で胸がいっぱいになった。

なお、バルセロナの「エル・ムンド」紙は、「平井丈一郎氏の演奏は驚嘆すべき純粋さと、時代に流されない確信性で貫かれていた。虚飾を排して音楽の本質に迫るその演奏はカザルスを彷彿とさせる格調高いものであり、胸を裂くような強烈な感動を呼んだ。平井元喜氏のピアノも音楽性あふれる素晴らしいもので、聴衆に強い印象を与えた」との論評を掲載した。

モア・ホールで行われたが、私自身「伝説の音楽家」呼ばわりされることへの戸惑いを感じる一方で、チケットは発売早々完売、当日は1曲毎に「ブラヴォー」の声が飛び、客席にはイギリスの人気チェリスト、ステイヴン・イツァーリス氏や世界的プリマ・バレリーナ吉田都さんの姿もあった。

#### NYからカザルス未亡人も 駆けつけ

さて、肝心のバルセロナについては、「カザルス埋葬30周年記念追善公演」と

たり、その記念の公式イベントとして私のリサイタルが開催されたからである（会場はバルセロナ近郊のエル・ヴェンドレイに建つカザルス音楽堂）。  
そしてもう一つは、ロンドンのマナージャーが「19世紀後半から20世紀前半に至るクラシックの黄金時代の芸術的遺産を今に受け継ぐ最後の巨匠」というコンセプトで私を招聘してくれたからである。

ロンドン公演は、かつてパデレフスキ、ラフマニノフ、カザルス、クライスラーも出演した、由緒ある音楽の殿堂ウィグ